石堂丸苅萱物語

五

へ13
3113
5上

と云ふ〳〵〳〵まことぱ。まことく達嘆さ〳〵て。義時の勢させる且六
且七が首狀あり。て。祖父と兄が実魂なるべしと許させおひ。
又宜しからんむう。藥光が祖父藥氏ハ嬪室傷室の嫉妬
おそろしく。世を觀じ剃髪して苅萱道心と稱し高野山へ隱
しをその子石堂丸彼山へ登れども名告あらず。一家の
男女追慕して。こゝを出家と遂しゝ。その家終に衰ふ。亦今
の石堂丸ハ仇と聲父あおひ。親子雙ぐ名を揚家と興ふ。
その功德先祖ハ勝ぐべし。彼且六兄弟ハ既ハ人と殺ての奸
賊るゝとり彼苅萱の射人お召加なべ末代までの瑕瑾なる

金貸本所
日本橋通二丁目
野口栄三郎

へ 13
3113
5

ぞこそふ。石堂これを聞とくべしと宣ふ。供奉の人〻も。仰寔ふ道理ゝ稱へうとく。繁光親子と祝しそう中ふ三浦九郎胤義のみ憖ふ且六と吹挙して。面目をうしなひぬ。天野政景ハ尚より石堂が勢かゞうゑ〻ふ〻〻歎び。通家の名誉ゝて。此父子とり沼ともみ。實朝公の寵遇と謝する。實朝既ゝ営中ふ帰りたまへハ。繁光ハ政景ととゝもみ石堂丸と持ゝ後宅ゝ。又あゝくめて父子合体の歓びとつゝもふ。石堂丸ハ父ゝ数回洋ゝてゝと。近属ゝく。父と誰とも。ちゝぶりしゝ。尋まゝ。ゝるふ由ゝく。化ふ打ゝる不孝。許さゝ

まゝとて。母が年来の患難。地蔵井の冥助。及ひ前ふ。ひとゝ。ゝれ。ゝ。政景ハ。繁光も政景も。ゝて。毎ふ嗟嘆ゝ。千引ハ稀なる烈女。ゝれハ。ゝゝ。ゝ。訪ゝ。彼ふ却ゝ。ゝゝふ信ゝふ。ゝ。数行の落涙ふ及ひ。ゝ。石堂丸ハ。母ゝ迎ゝ。ふ筑前國那河郡博多の城ふ入府ゝ。その行装前驅後從善ゝ美ゝ。故郷へ錦ゝ飾ゝ。ゝふ人ゝ。彼地ふ到着ゝ。ゝ。母ゝ城中ふ冊ゝ入ゝ。鎌倉ゝ。ゝの一五一十審ふ。ゝ。語ゝ。親子ゝ。ゝ。地蔵ゝ。ゝ。本堂の修造。年〻

橋枠全く
取衣つゝ
ふゝび家を
奥を

の佛餉のごとくも制度し。國の法度に定るおとく。ぬくぬ
母を扶けて。鎌倉へ立ぬ。藝光大ふろこぶく。瑞ちかう
出迎へ。久しく對面を歎ひ。千引杯伏して近くも
さまざまの。ふを君の傍妻なれぬいうで一ッ席ふつふ
ぶこと。謙退辭讓もこ。藝光すもく感嘆。これ
ふ音耗せしに。これ故ふ一生寡婦ふ。あらせとおりし
と以て。ふ嫡室桂江も。児子藝太郎も世に去ぬ。いと心
ぼもふ折しも。ふ母子ふ環會て。天幸ふ
家を亡ぬ。更ふ妻子に与ふ。これ今日より以ハ。後

妻。石堂ハ家の嫡子。伊の謙退ふ。ふ
ぬ。石堂丸が上ゆふ屋敷せ。頭ふその貞操を賞美し。折と
ふ。後妻といふ。鎌倉殿へ。ふ。父子天
婦ふ。その家ふ。栄天野政景が家ふ。親
く交ふ。舊好を忘ふ。これ昔鈴のうせ。
大輔坊源性が。彼鈴今より十余年を。ふ。宮中へ。
ひしふ。その術の長。これ稱賛
せり。藝光ハ。地藏丹の利益ふ。月毎ふ。前
國へ代参の使者を。ふ。現世ふ。一家の藝昌後世ふ。妻ふ

桂江子藜太郎。男丹助あが拔苦与楽を念願し。宝満山へも黙の布施しゝ。むゝ寄宿の恩に謝し。ゆづりやでさく詠めべきものと打はげぶるを。人も美をあらひれるぞ。

附言

友人某余ふりくの書のほぐめふ。和田亂長伊東ゝ崎の洞ふ入り仁田忠常富士の人穴ふ入るゝ巳記を。且忠常ゝ人穴ふへく神女よあふの圖載く巻端ふあり。されどもその說ハ却く省略ゝ、縱頼家卿憍奢のゝ巳いろんさでふ引用さるゝ。この両事ハ粗世俗のまゝることゝなり。童蒙その審うぶゝれを人て遺憾あるゝとせんゝ。こゝ御の益鞏のゝふあふねハ黙止しかゝくこゝふ抄書しゝ。更ふ剞劂巳骨さるゝものなり。

東鑑建仁三年六月一日條云、將軍家頼家著御

伊豆奥狩倉而号伊東崎之山中有大洞不知
其源遠將軍怪之已尅遣和田平太胤長被見
之胤長舉火入彼穴酉尅歸參申云此穴行程
數十里（鮮按関東往音六町為一里今猶鎌倉有七里濱其實四一餘町也是古言餘波足以獵鱠）暗兮不
見日光有一大蛇擬呑胤長之間拔劍斬殺訖
同書同年六月三日條云將軍家（頼家）渡御于駿
河國富士狩倉彼山麓有大谷号之人穴為今
究見其所被入仁田四郎忠常主從六人忠常
賜御劍（重宝）入人穴今日不歸出幕下○同四日

條云己尅仁田四郎忠常出人穴歸參往還經
一日一夜也此洞挾兮不能廻踵不意進行又
暗兮令痛心神主從各取松明路次始終水流
浸足蝙蝠遮飛于顔不知幾千万其先途太河
也逆浪漲流失據于欲渡只迷惑之外無他爰
當火光河向見奇特之間郎從四人忽死亡而
忠常依彼靈之訓投入恩賜御劍於件河全命
歸參古老云是淺間大菩薩御在所往昔以降
敢不得見其所今次算尤可恐乎

友人いふ。亂長洞ふ入て大蛇を斬へきもあれべし。思常人完ふ入て浅間神ふあるといふ。信ずかしとして余がいふ。桃源ふ漢晉と語り。井戸穿て地仙ふあふの類。唐山ふもかゝれ例多し。天地の廣大なる。何ものなりとせん。亦怪ふ足らぬ。

友のいふ。上巻ふ逸志を引く。鍾馗のる図説ふ。圖も又巻端ふ入る。和俗彼と鍾馗大臣と稱す。鍾馗ハ進士なり。その大臣と稱すること。更據なし。且近世我朝の士庚端午の幟ふ鍾馗ふ圖されるハ玄宗の夢ふ厄耗の鬼ふ除くといふ因ふ。されども鍾馗死して

の日。明皇緑袍を賜て葬しるハ。恩ふ感じるなり。夫ふ題し。厄耗の鬼を驅ふれハとなりなぐ露ふ好る。俗の爲ふ惡鬼ふ除せんとなれハなりとなれる。且鍾馗ハ落第の進士なり。志ふ果さずして。自殺せるものなれば羨ぐ人ふあふ。是を五月の戯ふ圖して。子孫の幸福延命ふ祝せるハいよ〳〵おほつるふ死爲るふ。やといふ。余がいふ鍾馗の説區〳〵。是を圖して祭ること。端午の戯のみふあらず。人ハ民間戸毎ふ門ふ鍾馗の画像を貼して。今その迷風遠三両國ふ残て。修験者より毎歳ふ人ふて

画像の側ふ山伏の名。何ぐ院と字し。半紙一枚ふ鍾馗の圖ふ押う。これを戸守と稱するぞ。余往年花洛ふ於歴せ日遠州の友人ふ就く。戸守の鍾馗一枚を藏むう。今按ずるふ是鍾馗の像ふあらぐ素盞烏尊を祭るし。その誤ふくこと久し。井沢氏の俗説辨ふ。垂加艸を引く云。熟田民舎粘素尊像而誤謂之鍾馗矣蟠龍子云。これハ簠簋ふ天笑吉祥天上舎城の王ふ。商貴帝と号と。婆羅門ふ牛頭天王といふとあり。牛頭天王ハ素盞烏尊なり。神代巻ふ素盞烏尊八束の鬚生うとあり。商貴と鍾馗と同音

なるゆ故ふ。亲混じて畫とこそ云へり。果しく素尊の像なるべ。端午の幟ふ画くこと笑ふ。ぞうふぐ。この尊ハ武勇逞くまくて。山田の大蛇ふ殺しまふことなどもひあらんべし。これ端午の幟ふ圖して。軍神と崇まくんそ。その故なるよあらぐ。今俗素尊を誂く鍾馗と称して。足下の議論も出ふあふう。亦玄宗の夢ふ鍾馗をえ見といふりのふ。例のそく書て。ゆく信ぐに足らぐこのるへ蟠龍子叮嚀も諸書と引く。審ふ辨じう。因ふて抄さべし。

宋沆括存中補筆談云宋征西將軍宗懿有妹

名鍾馗。後魏有李鍾馗。隨將喬鍾馗。揚鍾馗然
則鍾馗從來亦遠矣非起開元之時始有畫耳。
鍾馗字一作鍾葵〇續博物志云俗傳鍾馗起
於唐明王之夢非也北史云堯暄本名鍾葵字
辟邪于勁字鍾葵宋慤妹名鍾葵非特明王時
但葵馗二字異耳又曰終葵菜名本草綱目云
謹按爾雅云鍾馗菌名也考工記註云終葵椎
名也菌似椎形故得同稱俗畫神執一椎擊鬼
故亦名鍾馗好事者因作鍾馗傳言是未窮進

士能啖鬼遂成故事不知其訛也。
かゝるゆえに鍾馗と菌の名。終葵は椎の名也。その菌椎の形
似るゆえ故に同稱をもつて俗鬼を擊の神。また椎をもつて
圖ずるを椎に因て是をも鍾馗と稱ず。好事のものの鍾馗の
傳ずるの進士。鬼を啖と云。後世曉沼
らどーして鍾馗といふ進士。實に鬼を啖ひとおりふとぞ。且
鍾馗と稱せし人。唐以前も夥あり。終南山の進士の
ゆあいぞ。友のいふこゝろ說ずおりふ。ようず俗玄翁毒石ず
打碎故るゆゑ取て。今も石を碎く鎚を玄翁と稱ふ似

といふ。余がいふ。否。玄翁は有生の和尚。鍾馗は未生の進士。和漢同日の論なるべし。

友人いふ。足下好古の癖あり。考索頗る勤し。惜むらくは著述を務めず。毒稽の小説のみ。あるいは意志を費すの久しきといふ。余がいふ。著述は生活の一助なり。この故に人欲するところを捨て。人の欲するところを述。閲者一日の戯場なり。えらぶ。婦幼ふ害なり。人をえらぶ。仍者。もしくは公代とぶらふ。もしくは虚譚狐ふと。これが後俗を誣る患もなし。童蒙をして。これを因て。善を奬し。悪を懲さしむべし。自他の幸といふべし。但俗にいふ

習あり。古ふ粗その名のゆえるものを撮合して。新ふ一部の小説とし。善人と誣て。悪人ふ他人を。悪人ふ善人ふ俗にいふ。勧懲と云て。婦幼ふ害なり。人をえらぶ仍者の公と用ぎれいふ。水滸傳ふ忠義の二字を冠せられ。後人の議論を脱れ。後人の議論を脱れ。理あり。いと恥ぎれるもの。縦俗に設るものなれども。義理ふ違つる談。人もつて。甚だ。実ふ俗にふ悪ぎ。これも実ふ俗にふ悪ぎ。ぎれども。余駑不肖。万分の一をようせず。古人の名をかれ草紙にとり。近曾他人新編の佳作を閲

毎ふ就然とそれその及ぶ所とする。假初の作物語とふ所の如し。はいく先哲未發の說とりく。後人の惑ひを解んとのみ。こゝよりよりて所よあらんと。こゝに録する鍾馗の說も。井沢氏の辨ふ云へく。よく人の考とこゝろあれど。足下よりのたく答ぐ〳〵も腹ふくるゝぞのあぐ〳〵もう書はくみよ。閲者いかゝとるゝ〳〵。こんるもがさよやいかをゝん。

附言畢

軍書小說類藏板目錄 大坂心齋橋通南久寶寺町 伊丹屋善兵衛

源平盛衰記 片假名 廿五冊

後太平記 片假名 廿五冊

殘太平記 同 十二冊

四國軍記 一名土佐軍記 同 十二冊

駿臺雜話 室鳩巣翁の著也おもすて仁義の大々を示て鬼神の說和漢古今名將勇士の事行を辨治知の要論兵法和哥侍文の論說老傳の見あり 平かな 五冊

續武將感狀記 同 十冊

聖德太子傳圖會 平かな 六冊

補正行戰功圖會 平かな 十一冊

畫本西遊全傳 四十冊

太田道灌雄飛錄 左衛門大夫太田持資入道道灌三位藤政綱の後裔なりて朝谷上杉氏の家臣なり文武の英才を世に聞ざる一世の戰功忠義を委くしるせり 六冊

繪本玉藻譚 五冊

同白狐傳 一名書生物語 十冊

文學豊藏板

復讐石見英雄録　全部　五十冊

此書三編ハ作者各晉ヨリ四編以下廿九冊ハ一家の孝筆にて紀氏ヲ石見氏ニもして通編結綴の主人公ハ初編にて由良山獄の賊徒弥治兵衛ハ立の復讐を未遂る作者の新案を費せり七編ハ結局にて餘計の一家ハ八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑　八冊　同水戸藩士　稽亭子の原稿を曲亭翁の筆削せし　そ編ハ正の編ハ医人名を刺命孫て愛妾拉殊を殺し狂も奸夫偽三郎を騙りて盗賊と誣ゆへて殺さんとせしを青砥藤綱が明断各その罪を照て懲せる仮話婦案とす

蛍小室の八雲　八冊　同下野国岡城主牧野貞長の家臣平四郎国能が忠孝遠儒の新平治郎が妖術妖婦小夕郎が忠孝ハ家面白くものせり

同合邦辻　十冊

同亀山話　十冊

同彦山霊験記　十冊

同二嶋英雄記　十冊

同雪鏡談　十冊

繪本金花談　十二冊

世俗のいひしを偽る安珍の安奈と蔦葉がるとバ
おろ〳〵仮名〳〵紙をり

同浅艸霊験記　十冊

鎌倉年代圖會　五冊

於鎌倉の創業より宗尭親王の下向まで凡て將軍家五代の間の時事を変くまるゆ

同金毘羅神霊記　十冊

同誠忠傳　十冊

鎌倉大樹家譜　五冊

宗尭親王鎌倉ゆ着御より累世執權北條氏の滅亡條ハ一門亡びて後醍醐帝天下を平定し給まで

同孝感傳　十冊

同顕勇録　十冊

武藏坊辨慶異傳　十冊

羅世中が水滸伝の面目を換て変化せる

同奇縁傳　十冊

同忠孝美善録　十冊

大内多々羅軍記　六冊

大内義隆の弱者風流より雙陸囲碁武芸ハ三国
安芸浪人服部を罪ゆ隔れを妻を君を進

同伊賀越孝勇傳　七冊

三国傳奇　檀之二葉　六冊

文学堂蔵書

むるる妖婦生弱の方がなり陶屋張本の賜奴が
大悪逆なると正史に出入せる面白き稗史なり

近江縣物語　五冊

花山院の御代なるとき坂上梅丸が全傳うて
盗賊義原保輔壽明が殘暴と橋安世が
女國生が奥孫安世が勝常くの邪慾腰元のの
梅丸と上野光貞の娘を謂ひて賊徒征伐
の大將軍義原保昌を助けて賊を平らげ絶ゑ
近江掾は進み生の父母に逢ひ住結りてその
父の妙なるを聞きて知るべし

昔語松虫墳　六冊

延武の頃源玄河於聖の勇士野田太郎清秀氏安
武勇妹桂子ちゆ継母梶が奸淫安井隼太が陰
悪を田勝美義里から豊田の家老木滝保八が妻
松が狂乱が伊藤太郎と秋崎の遊女梅木が孝心
松虫墳紅塚などの由来をあらす

今昔二牧繪卷紙　六冊

天文の頃播磨國三木の城主別所長宗の臣
滝崎伝右衛門子女子ちゆ多年微小を仇なす
遠原勇義がつ紀松三郎左衛門が奸悪まで高
村の俄優が義勇をどつり絶る話こそ奥あり

矢口續話　新田神靈　忠孝貞婦傳　八冊

大庭伊織信淫八股田阪右衛門が姦計に中ら
て自害し妻の里人と家隷岩田翼助が貞烈
忠勇あて寃を雪ぐ一篇あり

復讐千丈松　七冊

近江の上松井逸者源人篠村大麓が敵後
れ茅両人まで年寛家を尋ひ青柳佐市
友人ともに彼の篠村を忠と義一篇

忠孝人龍傳　五冊

捕家外傳　弥生佐久羅　六冊

捕家の良民恩地左近が兄弥生佐久羅
佐久羅の妻庫が死子源二郎が胆勇敵寺の
奴と陰紀又沈田の里なる福富が女房白雪の
鶴松系罪を騙御秋山大膳の謀反八尾雪
童丸が滅亡源八郎の子孫をくさ

骨董新話　花標因縁車　五冊

小鯛半一郎浅草小金と義兄を偽り
墨の頃徳の常念法師が乃木の藤の因縁と

報恩珠話　十かえる花　六冊

建久年中上野出羽の山縣の郷士常盤井兼泰
兼則が二男龍二郎兄人ふ仙狐に誘れて教と
け猿年諸矛を助けて父の仇を山伏山を討ち
仙女去果見と昇天する奇話奇そとらべし

世野豊驗　二葉月梅　六冊

盛家の盗賊池上七九郎が悪悪のさ孝子
菊女と上田芳二郎が復讐の小説こて悪ゆ
年岩見三之丞義侠の老人を敬ふ
を綴りうの話

奥州小白田長の長藤清三郎右衛門の
十田民部を敬て松田伊織の朝
田夫婦と民部が孝民弥が義孝宅塊
民部が庶子武五郎と小童は復讐
させしを綴り

紙前の士人東條図書幼年にして父助を
失ひ仇山中壮二郎を尋ね久しく伺ひ撫う後
和州郡山まで後難せず幸害を遂し
て孔常の偉奇等紙に尽あり

南部小栗忠孝記　五冊

敵討

奥州南部の士竹内彰吾門藩を彰義の士
小栗忠孝と称し奸人を討殺せし事
小栗が後見助後藤を潜伏をうり得て
阿波屋は都き主の妻子を告知せて小栗
万二郎を悉く父の仇を報ぜし事実あり

長崎聞見録　五冊

理斎随筆　六冊

和漢の雑事　何れも新奇にして聞き捨難き
逸話を多く記せり

輪廻物語　五冊

伊達伊勢呂吉綱大臣赤の流転より安名と
高慢なる傳明　長崎ダイの色と悪く俗説の
作り話を紙有と　浮屠張陽雨赤乃
統を附会し統荒唐にして無空の結構
時に和漢の史外に出し寄話とも云へ

風流茶人氣質　五冊

東西両本願寺来由

繪本石山軍記

初編十冊出版
二編十冊嗣刻

土屋正義編述　松川半山画

此書ハ本願寺潜鱗より第八代蓮如上人自ら聖法左子の本流と蒙
王振水生玉の荘内石山伽藍と草創しぬふより第十代顕如上人の世ふ
到り織田信長此地の要害と申さるゝと本願寺と迎け攻撃と為ん
ぬ上人と十余年の戦争ハ既ハ京都と本願寺の事ハ
能織田の大軍ハ数の計と以て狂討ハ攻ハ等ハ悩し終ハ孫市の勇
戦同盟人尾藤九字の名号の旗の下の隙根本小雲蔡血戦討死柴田吉
の英智寺事と徳川家康死と決して小清水の名戦宜川ハ入ハ
勅命ハ依く顕如上人石山開城し紀州鷺森へ遷住信長ハ
之と改る時ハ逆徒明智光秀本願寺ハ拒く信長と戦ふ事

繡像復讐石見英雄孫　全部五十冊

南海　玉藻　主人　編輯
浪花　一驚斎　歌川芳梅　画

○初編　為助人作　○二編　玉藻主人副著　○三編　泉湯子副著　○第四輯以下作者一家

永禄天正の頃筑紫名嶋の勇士岩見重太郎橘種季が生さちより武者修行ビー田の武功大蛇の害を除き老鯉の妖を殺せ一勇威を張め後ろ天の擒ふ所八廣澂成澂八川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終ホ室町殿ホ奉仕て任官

○絵本太平水正ふ敵を討る事を聞ふ言聖峯豪ふ新月ホ子

○絵ふ黨の五雄と称せる勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯より八盗入僅境新話多り

浪花書肆　南久寶寺町心齋橋北エ入　前川善兵衛藏

出版人　大阪府下南久寶寺町四丁目　前川善兵衛